

異世界の傭兵団に転生した Ω カントが同じ部隊の α 団長に「お前が Ω だと他の連中に知られたらどうなるか分かってるよな」と野宮テントで毎晩口止め料を要求される話

全ファイルを読み込みました。プロット・感情カーブ・L O R A 文体・ネガティブプロット・世界観ルールを吸収しました。それでは本文を出力します。

股の間が、熱い。

ズボンの内側で、あるはずのないものがじくじくと疼いていた。二週間前から膨らみ始めた裂け目が、歩くたびに布地に擦れ、そのたびに脳の奥をちりちり焼く甘い痺れが走る。

(……違う。これは傷だ。行軍中に枝で裂けただけだ)

言い聞かせても、太腿を伝う湿り気は嘘をつかない。

白鴉団の野営地。六日目の夜。焚き火の爆ぜる音が森に吸い込まれていく中、ユーリは水場に行くふりをしてテントを出た。

茂みの陰でズボンを下ろす。震える指先が股間に触れた瞬間――

「っ――」

電流。

背筋を駆け上がる快感に、思わず膝が折れかけた。慌てて口を押さえる。指先がぬるりと濡れている。甘い。自分の身体から出ている匂いだと認めたくない。

(俺はぬだ。三年間ぬとして戦ってきた。こんなもの――)

テントに戻る途中、正面からゼーヴが来た。夜間巡回の帰り。百九十二センチの体躯が暗がりに黒々と聳えている。

すれ違いざま、ゼーヴの足が止まった。

鼻腔がわずかに動く。琥珀色の瞳孔が——瞬だけ、縦に裂けた。

「……水場か」

「はい。すぐ戻ります」

心臓が喉元まで跳ね上がっていた。

翌日の行軍。微熱が引かない。下腹部の疼きが波のように押し寄せ、歩くたびにカントの裂け目が擦れ、太腿の内側が濡れる。布が張り付く不快感と、その奥にある——認めたくない甘い痺れ。

昼休憩。ゼーヴが隊列を回って声をかけている。ユーリの番が来た時、他の団員と同じトーンで任務の確認をした。だが最後に、誰にも聞こえない声で。

「今夜、テントに來い」

——匂い、昨日より濃いぞ。

*

七日目の夜。テントの入口の幕が開いた。

ゼーヴが無言で入ってくる。紐で入口を閉じる。退路を塞ぐ動作に、ユーリの背筋が凍った。

「団長、何か――」

「脱げ」

「……は？」

「ズボンを脱げ。確認する」

声に含まれる圧が違った。ㇿ特有の命令フェロモン。ㇿなら感じない。だがユーリの膝は――震えた。下腹部に熱が集まる。

「何を、確認するんですか」

「お前が何か分かってて聞いているのか」

焚き火の爆ぜる音。虫の声。二人の間の空気が、鉛のように重い。

「お前の匂いが変わった。二週間前から」

一步、近づかれる。一步、下がる。背中がテントの壁に当たった。もう下がれない。

「お前、ㇿに覚醒してるだろう」

「違います。俺は♫です。入団時の検査で——」

「三年前の検査だ。身体は変わる」

ゼーヴの手がベルトに伸びた。反射的に手首を掴んで止めようとする。だが腕力の差は絶望的だった。片手で両手首を押さえられ、もう片方の手でベルトを外される。ズボンが膝まで下ろされた。

下着の布地が、股間から滲んだ液体で透けていた。

ゼーヴの呼吸が変わる。鼻から深く吸い込む。琥珀の瞳孔が縦に裂ける。

「……カントまで形成されてるのか」

（見るな。見るな見るな見るな——）

「これが他の連中に知られたらどうなるか、分かってるよな」

声は低い。脅迫というより、事実の確認。

「追放される。身元引受人なしでこの辺境に放り出される。運がよければ他の傭兵団に拾われる。運が悪ければ——闇市場だ」

「団長、俺は——まだ♫として戦えます。カントが……こんなものができたからって——」

「支障の問題じゃない。お前のフェロモンが濃くなれば、部隊の²が全員反応する。十一人の理性が保つと思うか」

言葉を失った。

「黙っていてやる。条件がある」

「……条件」

「毎晩、このテントに來い。口止め料を払え」

ゼーヴの大きな手がユーリの肩を押し、毛布の上に仰向けに倒された。両膝を割られる。

まだ完全に開いていない裂け目が、篝火のわずかな光の中で濡れて光っていた。

「っ……やめ——見ないで……っ」

「自分で触ったことは」

「……一度だけ」

「どうだった」

「……気持ち悪かった」

嘘だ。気持ちよかった。だからこそ気持ち悪い。男の身体にこんなものがある。こんなものが快感を返す。前世では普通に女と寝ていた。今の自分の股間に——女の器官がある。それをあの男に暴かれている。

（ここで声を出したら終わりだ。テントの布一枚向こうに仲間が寝てる）

ゼーヴの中指がカントの縁をなぞった。

「ひ——っ♡」

身体が跳ねた。声を殺す。歯を食いしぼる。だがカントから蜜が溢れ、ゼーヴの指を濡らした。

「力を抜け。歯を食いしぼると顎が外れるぞ」

中指がゆつくりとカントに沈んでいく。浅い。だがユーリにとっては初めて他人の指が入る感覚だった。自分のものとは違う太い指。異物感。そして——奥から押し寄せる、脳を灼く快感。

「んっ——♡……う、あ……っ♡♡」

（男なのに。男なのにこんな場所で感じて——）

ゼーヴは表情を変えずに指を動かした。カントの浅い部分を探るように、壁を押し、擦り、ユーリの反応を観察する。どこで震えるか。どこで声が漏れるか。どこで蜜が増えるか。

まるで武器の手入れをしているかのような冷静で体系的な動作。だがその琥珀の目だけが――異常な熱を帯びていた。

「っ、やめ……もう、口止め料は――」

「俺が満足するまでだ。お前に決定権はない」

二本目の指が入る。カントが押し広げられる。形成途中の器官を、強制的に「使える状態」にされていく感覚。

「お……っ♡ひろ、がっ――中、ひろげないで……っ♡♡」

（認めたくない。こんな場所で感じてる自分を認めたくない。でも身体が――身体が勝手に――）

ゼーヴの指が壁のざらついた部分を見つけた。そこを擦られた瞬間、ユーリの視界が白く弾けた。

「おあっ♡♡そっっ、だめっ――何、それ――っ♡♡♡♡」

「……………こっか」

ゼーヴの指がその場所を集中的に擦る。ずちゅ、ずちゅ、とカントから卑猥な水音が漏れた。

「ひっ♡ひう♡おっ♡おっ♡♡やだっ、声、出る——っ♡♡」

「出せ。隣のテントに聞かせてやれ」

「ッッ——♡♡♡」

脅迫。声を出したら〇だとバレる。だが声を出さずにはいられない。ゼーヴの指が加速する。カントの壁を挟るように、ざらついた部分を往復する。蜜が指の動きに合わせてぐちゅぐちゅと音を立てた。

太腿が震える。腹筋が痙攣する。カントから溢れた蜜がゼーヴの手を伝い、毛布に染みを広げていく。

「おっ♡おおおっ——♡♡だめ、何か来る——何か——っ♡♡♡」

（男なのに。男なのにカントで——カントだけでいきそうになってる——）
ゼーヴの指が奥を叩いた。一突き。深い。

「うおおあ——っ♡♡♡♡」

カントが痙攣し、ゼーヴの指を絞り上げた。男性器に一度も触れないまま、カントだけで達した。甲高い声がテントに反響する。

その瞬間——ゼーヴがユーリの首筋に歯を立てた。

「——っ！」

深く。くつきりと。皮膚が裂け、血が滲む。噛み跡。

「これはただの噛み跡だ。番の刻印じゃない」

琥珀の目がユーリを見下ろす。

「……今はまだ」

*


翌日。首筋の噛み跡を隠すために巻いたマフラーが、行軍中ずっと傷口に擦れた。そのたびにゼーヴの歯の感触が蘇り、カントが疼く。

（やめろ。思い出すな。あれは口止め料だ。それ以上の意味はない）

ゼーヴは隊列の先頭で、何食わぬ顔をしている。昨夜のことなど何もなかったかのように。ユーリだけが股間の疼きと首筋の痛みを抱えていた。

そしてこの日、身体の変化が加速していることに気づいた。カントの裂け目が深くなっている。昨夜ゼーヴに使われたことで、形成が促進されたかのように。

乳首の感度も変わった。鎧の内側の布が擦れるだけで、ぞくりとする。

（俺の身体が——俺の意思を無視して、として完成していく——）

*

八日目の夜。二度目の口止め料。

テントに入ると、ゼーヴは既に待っていた。

「今夜は何をさせる気ですか」

「口を使う」

「……フェラですか」

覚悟を決めかけたユーリの足を、ゼーヴが蹴り払った。仰向けに倒れる。両脚を肩に担ぎ上げられる。

「は——？ ちょっ、何を——」

「黙れ。声を出すなと言ったはずだ」

ゼーヴの顔がユーリの股間に沈んだ。

形成途中のカントに、舌が這う。

「っっ——♡♡」

予想していなかった。てつきり自分がさせられると思っていた。だがゼーヴは——ユーリのカントを、舐めている。

ぢゅる♡ぢゅる♡にちゅ♡にちゅ♡

「ま、待っ——そこ、汚——っ♡♡」

テントの外は静寂。聞こえるのは虫の声と、ゼーヴがユーリのカントを舐める湿った音だけ。

舌がカントの縁を舐め上げる。上端の小さな突起——クリトリスに相当する部位。ゼーヴの舌先がそこを見つけた瞬間、ユーリの身体が弓なりに反った。

「あ——っ♡♡♡」

声が出る。ゼーヴの掌がユーリの口を塞いだ。大きな手が顎から鼻までを覆い、呼吸すら制限する。

（だめ……だめだめだめ♡舌で、カントの中、舐められて——♡♡）

ゼーヴの舌がクリトリスを舐る。先端で弾き、唇で吸い、歯の裏でかりかりと擦る。そしてカントの内部に侵入し、壁を舐め、蜜を啜った。

にゅぷ♡にゅぷ♡ちゅるるるる♡♡

ユーリは手で口を塞がれたまま、鼻から荒い呼吸を漏らすことしかできない。腰が勝手に持ち上がる。カントがゼーヴの舌を締める。

行為の間中、ゼーヴは一言も発しなかった。黙々とユーリのカントを味わう。だが時折、喉の奥から低い唸り声が漏れる。その本音が滲み出る音。

「んっ——んんっ♡♡ぐんぐん——っ♡♡♡♡」

一度目の絶頂。クリトリスへの集中的な刺激で。口を塞がれたまま全身が痙攣し、カントがゼーヴの舌を絞った。

「……っ♡は……はあ……もう、いい——」

手を外されて懇願する。だがゼーヴは顔を上げない。今度は舌をカントの奥深くに差し込み、壁を抉るように舐め回した。

ずちゅ♡ずちゅ♡ぐちゅ♡ちゅるるる♡♡♡♡

「おっ♡おおっ♡♡奥っ、舌で——奥を——っ♡♡♡♡」

二度目。カントの奥を舌で抉られて達した。身体が跳ね、股間から液体が噴き出した。

——潮。自分の身体がそんなことをするとは知らなかった。ゼーヴの顔を濡らす。

「っ……ごめ——汚——」

ゼーヴが顔を上げた。顎を伝う液体を拭いもせず、ユーリを見下ろす。暗がりの中、琥珀の瞳孔が完全に縦裂きになっていた。

獣の目。

「お前の身体は正直だ。頭より先にカントが答えを出してる」

ユーリの頬を涙が伝っていた。快感と羞恥と、自分の身体が女のように反応することへの激しい拒絶。

「俺は男だ。こんな……こんな身体——」

「男だろうがっだろうが関係ない。お前は俺の部隊の人間だ。——俺が守る。代わりに、代価を払え」

ゼーヴがユーリの太腿の内側に歯を立てた。首筋より深い。鬱血した紫色の痕。鎧を着ていれば見えない場所。

「痕、つけるの好きですね」